

## 岷江入楚の秘と箋

——「秘」に記された三条西実枝説——

岷江入楚は、肩付や注末に引用した注のの略称を記す。そしてその一覧が「此抄肩付」として記されている。それによると「秘」は三条西公条注であり、「箋」は同実枝注である。これらの注記により、記された注の由来がわかるが、中には肩付に「箋曰」と記し、注末に「秘」とする注が見られる。「秘」も「箋」も三条西家において継承された注であるから、両者が一致することはしばしば見られる。岷江入楚にも「秘箋」と両者を並記したり、あるいは「秘同」などとして両者が一致することを示す注がしばしば見られる。しかしながら、肩付と注末の注記が異なるのは数例に限られる。本稿ではこれらの注を中心に、岷江入楚の「秘」と「箋」について検討したい。

### 一 明星抄に記された「箋曰」

岷江入楚には、肩付に「箋曰」とあり注末に「秘」とする注がみら

小 高 道 子

れる。小川陽子氏は岷江入楚の「肩付」についてその数に応じて○△×の記号を付した表を作成されたが、そこでは、これらの注を「箋」として数えた上で、「秘抄」からの引用「『秘抄』からの引用した可能性が高いもの」などと注を付された。「秘」と「箋」とは、いずれも三条西家の注であるから、「箋」が「秘」を引用することは十分に想定される。しかしながら、こうした注記の注が、これらの十数例のみ記されていることには、疑問も残る。そこで先行注釈書を参照すると、「箋曰」と注記されたこれらの注は、明星抄に「箋曰」として注記されていることがわかる。次に明星抄に「箋曰」として記された注のうち、明星抄に「秘」として引用された注を、岷江入楚の該当する注とともに掲出する。注の項目は岷江入楚の項目により、源氏物語古注集成の番号と巻名とを付す。また、私に通し番号を付した。

1 真木柱 11 心あさき人のためにて

箋曰 心あさき人とは弁のおもとか事也 此人聊爾なる道ひきが  
高名にて石山の利生をあらはしたると云也 私云以上秘 此箋ノ  
義三光自筆ニテ首書ニアリ(岷江入楚)

箋曰 心浅き人は弁のおもとか事なり 此人の聊爾なる道ひきが  
高名にて石山の利生をあらはしたると云也(明星抄)

2 真木柱 53 今さらに人の心のくせ

箋曰 人の心のくせとは大将の事をいふ也 くせとは心のくまあ  
る人をおほく此物語にかけり以上秘(岷江入楚)

(朱)箋曰 人の心のくせとは大将の事を云り くせとは心のくまあ  
る人を多く此物語にかけり(明星抄)

3 真木柱 487 野をなつかしみあかいつへき

箋曰 主上の御詞也 かたしけなしといふより玉かつらの心也  
(岷江入楚)

箋曰 主上の御詞也かたしけなしと云より玉かつらの心也(明星)

抄)

4 梅枝 122 めつらしとふる郷人も(以下略)

(頭注)三光自筆箋曰 北方ハ若菜巻ニ定レリ 此時ハ北方ト云ヘ  
キ人ナシ(岷江入楚)

箋曰 北方は若菜巻にさだまれり 此時は北方と云べき人なし  
(明星抄)

5 梅枝 223 かかる御中におもなくくだす

同(私注 秘)箋曰 源の詞也 されともと——宮ほとはざりと  
もかき給へきと思ひしにと也(三光自筆)(高)(岷江入楚)

朱箋曰 源の詞也 私云三光院自筆なり(明星抄)

6 藤裏葉 93 文藉にも家礼といふことあるへくや

箋曰 此段諸抄の心(中略)可味之 已上秘抄ノ内ヘ三光院自筆  
ニ被書入之(岷江入楚)

箋曰此段諸抄の心(中略)可味之(明星抄)

7 藤裏葉 135 わか身いと、いつかしうそ

箋曰 いつかしくはいつきかしづくの方にておほえのたかき自称ナルヘシ つゐに内大臣のまけ給へる故也 私云 此義尤よし  
秘抄ノ下へ三光院自筆ニかき入られたり（岷江入楚）

箋曰 いつかしくはいつきかしづくの方にて覚えの高き自称なるへし 終に内大臣のまけ給へる故也（明星抄）

## 二 明星抄に記された「箋曰」と岷江入楚

明星抄に「箋曰」とする書入れがあることは、すでに榎本正純氏が指摘されている。<sup>4</sup>氏は、こうした書入れについて指摘され、次のごとく記された。

このように実枝は所持本の明星抄や秘抄に「箋曰」と肩付して同じ内容の注を書入れているのである。

前項で引用した「箋曰」七例は、確かに岷江入楚に秘を通して引用されたと推定される。しかしながら、明星抄に記された「箋曰」には、岷江入楚に引用されなかった注や、「秘」を通さずに岷江入楚が引用したと推察される注もみられる。次に、こうした注をそれぞれ一例ずつ挙げておく。

8 乙女594 かの人はふみをたにえやり給はす

岷江入楚

秘 雲井鴈のかたへ文をたにかよはし給はぬと也

私云 此義又三抄共ニ雲井鴈の事とあれとさとはみえ侍らす 或抄又聞書には五節の事とあり 尤然へし

明星抄

雲井鴈へ文をだにかよはし給はざる也

朱箋曰 五節への事也

「かの人」について、通勝は雲井鴈とする「三抄」について「さとはみえ侍らす」として、疑問を持つている。そして「或抄」「聞書」に「五節の事とあり 尤然へし」としている。「秘」をはじめとする「三抄」に疑問を持ち、「或抄」「聞書」説について「尤然へし」と記している。そしてこの「かの人」を「五節」とする「或抄」「聞書」説は、明星抄に「箋曰」として記されているのである。しかしながら、この説は通勝に伝えられることはなかった。両者を比較することにより、実枝は「箋曰」として明星抄に記した注記の一部しか通勝に伝えていないことがわかる。

9 常夏45 中将君もくはしくき、給へる事なれはえしもまめた、す

岷江入楚

花 夕霧の事也

(略)

秘 花鳥夕霧云々 如何 是ハ柏木也

(弄・御説・聞が柏木説であることを記す)

箋 箋曰夕霧也 花鳥説可然 非柏木 其故ハ此席ニハ弁少將藤

侍従ノ兄弟兩人斗也 柏木ハ今日ノ席ニ参入トハ不見也(略)

私云 此箋ノ義尤可然 花鳥ノ義ヲ用ヘシ

明星抄

花鳥夕霧と云々いか、 是は柏木也 此事柏木の取持てし出給ふ

事なれば弁ノ少將にさして此事をの給ひかくる也

箋曰 花鳥説可然 此席に柏木は参会なし 中将の朝臣といふは

柏木也

「中将君」について、「夕霧の事也」とする花鳥余情説を「秘」は否定して「是ハ柏木也」と記している。これに対して明星抄は「箋曰」として「花鳥説可然」と記している。「此席に柏木は参会なし 中将の朝臣といふは柏木也」というのである。「秘」と異なる解釈であるからだろうか。前項に引用した七例と同様に「明星抄」に「箋曰」として記された注であるにもかかわらず、この注は、「秘」とする注記なしに、岷江入楚に引用されている。

こうしたことから、実枝は「所持本の明星抄や秘抄に「箋曰」と肩付して同じ内容の注を書入れている」というよりはむしろ、明星抄に書き記した「箋曰」を、注の内容に応じて「秘」に書き入れたり、そのまま通勝に伝えたりしていたと推測される。明星抄に記された実枝の書き入れについては、稿を改めて検討を加えたい。

## 注

- (1) 岷江入楚の引用は源氏物語古註釈叢刊による。また、源氏物語古註集成の番号を付した。
- (2) 「岷江入楚」と先行注釈——中院文庫本の肩付を起点として——(『中古文』97 平28・6)
- (3) 明星抄の引用は源氏物語古註釈叢刊による。
- (4) 榎本正純『源氏物語山水の研究』(平8 和泉書院)